



青野 重利

分子研在籍時：生命創成探究センター／生命・錯体分子科学研究領域 教授



定年退職を迎えて思うこと

あおの・しげとし／退職後は、毎日が日曜日のような暮らしをしている中で、ウォーキングで体調維持に努めています。研究所の周辺を歩いていることもありますので、目に留まりましたら、是非、お声をかけて下さい。

2002年5月に岡崎に赴任してから約23年が経過し、2025年の3月末で無事に定年退職を迎えることが出来ました。若い頃、定年を迎える先生の退職記念行事などで「無事、定年退職おめでとうございます」との言葉を聞いた時には、仕事を辞めないといけないのが何でめでたいのかと思っていました。しかし、自分がその立場になってみると、大過なく無事に定年を迎えられたことは、本当にありがたいことであると実感しています。全く思い残すことなく研究生生活を終えられたかと問われると、正直、まだやり残したと、やってみたく思っていた研究に手をつけられなかったことなどに対

する思いが残っているのは事実ですが、これらは自分の能力不足の結果であると割り切るしかありません。

岡崎では、統合バイオサイエンスセンター（後に、岡崎統合バイオサイエンスセンターを経て、生命創成探究センターへと改組）を本務とし、分子研を兼務する形でしたが、研究を進めるにあたっては分子研から多大なサポートいただき、大変恵まれた環境で研究を実施することができました。充実した研究費・研究スペースといった直接的なサポートのみではなく、大学共同利用機関としての活動からも様々な恩恵を得ることができました。共同利用研究では、もし分子研に

なければ実施することはなかったであろう共同研究から、自身の研究においても新たな展開を図ることができました。また、岡崎コンファレンスや分子研研究会の企画・開催を通じて人的ネットワークを拡げることもできました。共同利用研究は、分子研の重要なミッションの一つですが、自身の研究の発展にも役立つはずですので、現役の先生方には、積極的に共同利用研究に関与していただければと思います。

最後になりましたが、岡崎に在任中にお世話になりました全ての方々に、改めて御礼申し上げます。本当に、ありがとうございました。

石崎 章仁

東京大学大学院理学系研究科化学専攻 教授
(前 理論・計算分子科学研究領域 教授)



桃の蕾

いしぎき・あきひと／京都大学理学部で学んだ後、京都大学大学院理学系研究科化学専攻・量子化学研究室にて博士（理学）を取得。2008年4月よりカリフォルニア大学バークレー校化学科にて日本学術振興会海外特別研究員、2010年4月よりローレンス・バークレー国立研究所にて博士研究員。2012年3月より分子科学研究所にて特任准教授、2016年4月に教授に昇任。2024年10月より東京大学大学院理学系研究科化学専攻において量子化学研究室を担当しています。

2024年10月7日の夕刻、東京大学理学部における私の講義「量子化学Ⅰ」が始まりました。分子への応用を念頭においた量子力学に関するものです。量子力学という用語が初めて世に出たボルンの論文“Über Quantenmechanik,”

Zeitschrift für Physik **26**, 379 (1924)、ボルンがハイゼンベルグと共に書いた“Zur Quantentheorie der Molekeln,” *Annalen der Physik* **379**, 1 (1924) の出版から、ちょうど100年になります。量子力学の節目の年に異動し、この講義を担当す

ることになったのは、まさに巡り合わせの妙でした。歳を重ね、いつかは「もう、ええわ！」と笑われるくらいに、語り続けることになるのかもしれませんが。

分子研では12年半にわたり研究活動を行いました。2012年2月28日の

朝、サンフランシスコ空港を発ち、29日の夕暮れ時に成田空港に到着。翌3月1日の午前10時に辞令をいただきました。日本に帰るのか、米国に残るのか — さまざまな感情が入り混じる複雑な思いで帰国・着任したような気がいたします。十余年も過ぎてみると、そうした感情の輪郭も薄れて、懐かしさだけが残るようです。分子研では、淡々と自分の研究を続けてきただけで、[分子研を去るにあたり]に相応しいドラマチックな出来事は、残念ながら無かったかもしれません。それでも思い返せば、研究主幹や人事選考部長など、他の研究機関に属しては得られなかったであろう、自身を深め鍛える貴重な機会に数多く恵まれたことに、心から感謝しています。

2022年4月から、理論計算領域の主幹として主幹施設長会議に出席する

ようになりました。このオンライン会議では、発言の有無にかかわらず、カメラをオンにします。判断の難しい案件の審議中、画面に映ったしかめっ面の自分の顔が、ふと目に留まることがあります。あの古い写真と目元は些かも変わらない — 内心苦笑し、そっと表情を緩めます。小学校に上がる前だったと思います。オーバーオールポケットには、たくさんの桃の蕾。大和葛城の稜線を望む祖父の庭には、桃の木がありました。花が咲く前の蕾をほとんど摘み取ってしまったのですから、厳しく叱られたのも無理はありません。膨れっ面をおもしろがった誰かがフィルムに収めたのでしょう。

幼い日の出来事を思い出しながら、大学で後進の育成に挑もうと決意するきっかけとなった言葉が、胸によみがえります。「一つ一つの研究は残らない

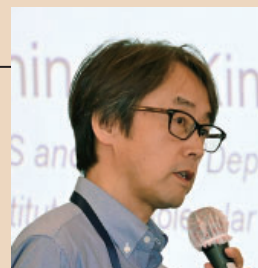
かもしれないけど、人は残る。大学で人を育ててみませんか」——あの日のように蕾を摘んでしまうことなく、花が咲き、やがて実を結ぶように。その歩みを信じて、研究と教育に心を尽くしてまいります。

最後になりましたが、分子研では Nguyen Thanh Phucさん、三輪邦之さん、布能謙さんが助教・特任助教として、また、藤橋裕太さん、加藤彰人さん、池田龍志さん、Jo Ju-Yeonさん、坂本想一さん、Yan Yamingさんが博士研究員として研究活動を支えてくださいました。もちろん、山田真理子さん、赤羽厚子さん、増田道子さんによる事務支援がなければ、研究室の日々の運営は成り立たなかったことは言うまでもありません。この場をお借りして、心より御礼申し上げます。皆様、ありがとうございました。

木村 真一 大阪大学大学院生命機能研究科 教授 (前 特別研究部門 教授 (クロスアポイントメント))

4回目の出所

きむら・しんいち / 1988年東北大学理学部卒業、1991年東北大学大学院理学研究科博士課程修了、理学博士。日本学術振興会特別研究員、神戸大助手、分子研助手、神戸大助教授、分子研助教授・准教授を経て2013年より現職。2020年4月～2025年3月 分子研教授 (クロスアポイントメント)。



私が分子研を出所^[1]するのは、助手の1998年、客員助教授の2001年、准教授の2013年^[2]に続いて4回目です。今回はクロスアポイントメントの教授として、当時の川合所長と現在の渡辺所長をはじめとして、受け入れていただいた横山教授やUVSORと装置開発室のスタッフの方々、事務関係をやっていただいた秘書さんたちに大変お世話になりました。ここに感謝いたします。

2020年4月より阪大と分子研の2重生活が始まりましたが、時はCOVID-19で社会が止まり始めた頃で、世の中

はステイホーム一色で移動もままならない時期でした。大学でも在宅での勤務が推奨され、講義もすべてオンラインで実施されていましたが、分子研からは出勤することが求められていたので、2週間に2日ずつ、1両に数人だけしか乗っていないすかすかの(快適な)新幹線を通うことになりました。

当初の目的として、放射光実験と相補的な共鳴非弾性電子散乱法の開発を行う予定でした。そのための実験室も確保させていただきましたが、学生さん等の移動も難しい時期であったため

に、当初の計画にあった大学の人的リソースと分子研のリソースの融合はなかなか進みませんでした。しかしながら、多くの困難な部品を装置開発室の高い技術力により開発していただいて装置を完成させることができ、さらには、開発した装置の1つが特許出願^[3]に至ったことは良い成果だったと言えます。また、UVSORでの実験研究もかなり進展し、クロアポの期間中にプレスリリースを2件^[4,5]と終了後に1件^[6]出すことができました。

今後もUVSORの利用研究は継続し

装置開発室にも新規機器開発でご協力
いただく予定ですので、お世話になり
ます。引き続き、どうぞよろしくお願い
いたします。

- [1] 助手のころ（1990年代）、分子研から異動することを「出所」と言っていた。
[2] <https://www.ims.ac.jp/publications/letters70/70-11.pdf>
[3] 特願2024-106167
[4] <https://www.ims.ac.jp/news/2022/09/0928.html>
[5] <https://www.ims.ac.jp/news/2023/12/1204.html>
[6] <https://www.ims.ac.jp/news/2025/08/0820.html>

中村 彰彦

静岡大学 グリーン科学研究所 教授
(前 特別研究部門 教授 (クロスアポイントメント))



2回目の卒業させていただきました

なかむら・あきひこ／2014年3月東京大学大学院農学生命科学研究科博士後期課程修了。博士（農学）取得。
2022年8月から2024年12月までクロスアポイントメント准教授、2025年1-3月は本務昇進に伴いクロス
アポイントメント教授。

2019年12月に静岡大学にテニュア
トラック准教授として転出させていただ
き、2022年8月から再びクロスアポイ
ントメント准教授としてお世話になった
ため、通算7年4ヶ月在籍させていただ
きました。地方大学の若手研究者に実験
機会を提供するという理念の元、クロス
アポイントメントとして1年の25%通わ
せていただいております。実際に静岡
大学に着任してからは業務に追われ困っ
ておりましたので大変ありがたい機会で
した。そのおかげで無事にテニュアトラッ
ク審査を通過し、2025年1月より現職
として働かせていただいております。静
岡と岡崎ですと物理的に距離が近く、学
生を気軽に連れて行けるというメリッ

がありました。実際に1週間ほどロッジ
に滞在してもらい実験を行わせていただ
いたり、共通機器を使わせていただいた
りすることができ教育上も大変助かりま
した。また学部生の担任をしていた際に
は、ちょうどコロナ明けのタイミング
で、まだ会社などの研究所が学生の見学
を受け入れていただけない時期でありま
したが、学科の学生の見学を受け入れて
くださりご対応いただいた皆様には大変
感謝しております。学部3年生での見学
というタイミングもかさなり、見学で岡
崎を訪問させていただいた数名は総研大
に通っております（ただし基生研と生理
研にいてしまいましたが……）。話を聞
いてみると岡崎3機関の存在をしらない、

または凄さを知らない学生さんが多いだ
けなので、認知されれば選択肢に入るよ
うです。静岡大学には3割くらい愛知出
身者がおります。特に3年生あたりを狙っ
て工学部、理学部あたりの学生さんの見
学を受け入れると分子研にも大学院生の
応募があるのではないかと思います。

最後に、川合前所長及び渡辺所長をは
じめ、分子研と事務センターの皆様には深
く感謝申し上げます。そして研究主幹及
び受け入れ教員としてご対応いただいた
飯野先生及び原島先生、大友先生（現京
大）また各種事務手続きをご対応いた
だいた野村様、川口様には大変お世話にな
りました。また卒業生として今後ともよ
ろしくお願いいたします。

前島 尚行

立命館大学 理工学部 物理化学科 助教
(前 物質分子科学研究領域 電子構造部門 特任助教)



分子研での生活

まえじま・なおゆき／2014年3月奈良先端科学技術大学院大学博士後期課程修了 博士（理学）奈良先端大、
原子力機構、名古屋大学、立教大学、分子研を経て現在立命館大学に勤務

2023年8月から2025年3月まで
の約1年半、電子構造門横山グループ
の特任助教としてお世話になりました。

着任前も機器センターやUVSORのユー
ザーとして分子研にお世話になったこ
とはありましたが、学生時代にご指導

いただいたUVSORの松井文彦先生か
らお知らせいただき、横山グループに
お世話になることになりました。

研究面では雰囲気光電子分光や低熱膨張材料のEXAFS測定などの放射光実験に参加させていただく一方で、立教大学に所属していた頃から行っていた金属基板上への原子層リン超薄膜作製の研究を引き続き進めさせていただきました。研究室の装置も自由に使用させていただき、放射光実験もたくさん行わせてもらいました。このような充実した研究環境を提供していただいた横山利彦先生には大変感謝いたします。

同じく横山グループ特任助教の倉橋直也さん、栗田佳子さんにも日頃からお世話になりました。また機器センターの石山修さんにはBL4BのXMCDについていろいろ教えていただき、伊木志成子さんには光電子分光装置の利用で大変お世話になり、ありがとうございました。学生の時以来光電子分光を用いた研究を行ってきましたが、放射光ユーザーとしての利用がほとんどでしたので、実験室光源での実験はいろい

ろと気づきがあり楽しかったです。

現在は立命館大学に移り、主に立命館大学のSRセンターで光電子分光やXAFSなどを用いて引き続き金属基板上の薄膜成長について研究を行っています。分子研での自由な研究生活で得た様々な経験を次に生かしていけたらと思います。ありがとうございました。

萩原 健太

東京大学 大学院工学系研究科 附属量子相エレクトロニクス研究センター 助教
(前 極端紫外光研究施設 特任研究員 (IMS フェロー))

新しい感覚

はぎわら・けんた／ドイツで博士号を取得後、分子研を経て、現職。光電子分光を用いた物性物理の研究に従事。



ドイツで博士号を取得後、分子科学研究所に着任しました。学生から社会人となり、また、初めて放射光施設での常駐となり、戸惑うことばかりでしたが、2年5カ月間お世話になりました。所属したグループの松井先生はじめお世話になった分子研のみなさんに感謝申し上げます。スキー旅行やお花見なども良い思い出となっています。また、UVSOR放射光施設のユーザーのみなさんとも親しくさせていただき、いつも気にかけていただき、ありがとうございました。

UVSOR放射光施設で働いて一番学んだことは、この施設が教員、技術職員、事務支援員など多くの人によって支えられていることです。これは、学生時代にユーザーとしてUVSORで実験を行っていたときは、特に深くは気づかず、実際に働いたからこそ、学べたことだと思います。光源加速器、放射線安全管理、消耗品や設備の管理、来所

手続きなどなど、実験や研究に直接関係ないかもしれない仕事を陰ながら支えていただいている人がいるからこそ、わたしたちは、これが当たり前かのように実験や研究ができているのです。とりわけ、技術職員のみなさんの縁の下での力持ちとしてのご貢献の大きさを実感しました。UVSORのために惜しみなく時間や労力を費やし、見返りを求めずに尽力されている方々の姿には、いつも頭が下がる思いです。しかしながら、そうした方々が置かれている環境が必ずしも十分ではないと感じることがあり、その点については、たびたび複雑な気持ちになります。普段はあまり脚光を浴びることがなく、組織の意思決定に関与する機会が少ない職種の方々が最先端の科学技術を支えていることについて、社会全体の理解がさらに深まり、待遇面を含む職場環境の改善に向けて、自然科学研究機構が先頭に立って行動していくことを願って

います。放射光施設が多くの人に支えられていることは、分子研から離れても、たとえ、違う業界にいても、心にとりとめておきたいと思います。そして、わたしが研究活動や業務を行うことができたのも、このようなみなさんのおかげです。心より感謝申し上げます。

送別会でいただいたワインに「新しい感覚を教えてくれてありがとう。」という寄せ書きがありました。たとえ一人でも、たとえ少しの共感でも、わたしを受け入れてくれた人がいたと思うと、わたしが分子研にいた甲斐が少しはあったかなと思うと同時に、学生と一緒に活動する大学という新しい職場でわたし自身も、新しい視点を積極的に吸収し、時代の変化に取り残されることのないよう、研鑽を重ねていきたいと思います。